チーム援助の具体的な支援とその体制について

学籍番号（219224）
氏　　名（松田　殊里）
主指導教員（梅川　康治）
副指導教員（庭山　和貴）

１．本研究の背景と目的

近年、様々な援助ニーズを抱える生徒に対応するため、学校と関係機関が連携・協働し、学校内外での支援体制を充実することが求められている。チーム援助に関する研究は多くなされており、チーム援助を行うことにより、心理教育的援助サービスを促進できたことが明らかになっている。（田村・石隈 2003）

実習校での特別支援学級在籍生徒は、授業をすべて通常の学級で受けている。そのため、特別支援学級担当の教員や特別支援教育支援員（以下サポーターとする）は担当する生徒の状況に合わせて、授業に参加（以下入り込みとする）して、学習支援等に取り組んでいた。通常の学級で指導する教科担当教員と特別支援学級担当の教員とサポーターがチームを組んで支援することが生徒の学習にとって重要な役割となっていることが理解できた。

本実践課題研究は、実習校の生徒・教職員等が求めている援助ニーズとそれに対する「チーム」としての支援体制について情報を収集・把握し、支援の充実を検討することを目的としている。

２．学習支援の情報共有

報告者は、特別支援学級担当の教員やサポーターとともに「入り込み」の経験を活用して、学習支援のチーム体制の現状について情報収集した。学習支援に関する情報が、特別支援学級担当の教員やサポーターと通常の学級を指導する教科担当の教員との間で、どれだけ共有されているのかを確認したところ、「互いの求める学習支援についての情報」の共有が不十分であることを感じた。そこで、情報共有のさらなる充実化を目指すために、既存の情報共有の手段である「入り込みの記録」や「教科担当教員と保護者の情報交換となっている週間連絡帳」を基に、教員等のニーズを取り入れた「情報共有シート」の作成に取り組むことにした。

３．情報共有シートの作成

これまで実習で行ってきた情報収集や観察結果をもとに、生徒に関わる教員やサポーター等で求められているニーズを取り入れた。ただし、記入する負担を少なくするためＡ５サイズに変更し、記入する項目をシンプルにまとめるなど工夫した。例えば『感想』、『質問への答え』、『入り込み担当者へのお願い』、『その他』など細かく記述する項目を分けていたが、より自由なコミュニケーションが生まれることを期待して『教科担当より』という項目にまとめ、個々の裁量で記述できるようにした。

４．実践の結果

期間を決めて「情報共有シート」の使用を関係者にお願いした。実施後、「情報共有シート」を使用した教員やサポーターにインタビュー調査を行い、効果や課題を整理した。報告者の実習日に限定して実施した。

教科担当の教員１名、入り込みを行なっている支援学級担当の教員１名、サポーター２名を対象にインタビューを行った。その結果、91 センテンスから、29 のサブカテゴリー・15 のカテゴリー・7 の大カテゴリーが生成された。

報告者、教職大学院院生６名と大学教員１名の合計８名で KJ 法に沿って整理・分析に取り組んだ。作成した関係図をもとに実践を振り返り、その結果について考察した。

５．考察と課題

インタビューの中で、「教科担当と入り込み担当の繋がりになる」という言葉が印象的であった。「情報共有シート」は、教員等間のコミュニケーションづくりに役立つことや教員等がチームとなって生徒を支援することにつながるきっかけづくりとなっていたことに気づけた。「情報共有シート」の重要な役割に気づくとともに、シートに記入する内容が教員等の負担にならないようにするためにどのように書けばよいかの具体例が書いてあるシートも必要であることも理解できた。

今後の課題は、シートをさらに使いやすいものにするために、「記入する項目内容の選択」・「記入例の作成」・「回覧する回数や頻度」などについて、さらに実践・検討をしていくことが課題であり、今後も探求していきたい。